

受賞記念寄稿

石川 博樹

はじめに

この度は各分野の優れた研究者の方々が参加なさっているナイル・エチオピア学会の高島賞を受賞し、非常に光栄なことと感激している。尊敬する先輩方が受賞なさっている賞であるため、大変恐縮するとともに、自分がこの賞に値する者であるか内心忸怩たる思いでもある。受賞記念稿の依頼を受け、内容をどのようなものにするか思案したが、前回受賞者の増田研先生に倣い、自らの研究を振り返ることにした。以下、これまでの研究の歩み、そして現在の研究内容について、受賞対象となった拙稿の内容を交えて綴ってみたい。



ポルトガル・ブラガ文書館

ゲエズ語文書講読会

自己紹介の際に「エチオピア北部史を専攻しています。」と言うと、大抵「なぜエチオピア史を研究しようと思ったのですか」と尋ねられる。その場合「それを話すと長くなるのですが」と断って、以下の内容をかいつまんで話すことになる。

私が初めてエチオピアの情報に接したのは小学生の頃で、当時連日伝えられたエチオピアの飢餓の記事を読んで、子供ながらに衝撃を受けたことを臚げに覚えている。その後飢餓と内戦に関する一連の報道によって、エチオピア及びエリトリアに興味を持つようになってはいたものの、エチオピア北部史研究に踏み入る直接の契機は、東京大学入学後に薜勇造教授の講義に出席したことであった。

教養学部改革によってかなり授業選択の幅が広がっていたとはいえ、教養課程の授業の大半は私には退屈なものであった。その中で別格であったのが薜勇造教授の講義である。講義は、1世紀にエジプト在住の商人が著した、紅海とインド洋の商業案内書『エリュトラ海案内記』に先生が解説を施していくという形式で進められ、詳細で専門的なその内容は圧巻であった。歴史学と考古学のいずれを専攻するか迷い、縄文時代の遺跡の発掘に参加したりしていた私は、この講義を2年続けて受講する中で、先生の御指導を仰ぐことにした。

文学部進学後、古代南アラビア史研究のためにベルギーでゲエズ語（古典エチオピア語）を習得なさっていた薜先生がゲエズ語文書講読会を開いて下さった。内容はラムディンの文法書で文法の基礎を学んだ後、ディルマンの文法書と辞書を用いながら『諸王の栄光（ケブラ・ナガスト）』などのゲエズ語文献を精読していくというものであった。そこに出席していたのはエチオピアの諸言語を専門となさっている若狭基道氏、初期イスラム史の高野太輔氏、キリスト教初期修道制が御専門の戸田聡氏などで、いずれもアラビア語をはじめとするセム系諸語に通じた方ばかりであった。講読のレベルは非常に高く、「意味をとることが出来るのは当たり前」とされ、文法的に問題となる箇所分析が主眼とされた。私が匙を投げた箇所は軽やかに解釈され、写本作成者の誤写であろうと気にもとめずに見過ごした箇所が重要な論点になることがし

ばしばであった。それとともに目を見張ったのが、ディルマンの研究の深遠さであった。何か特殊な事柄があって辞書を引くと、必ずといって良いほど詳細な解説が付されていることに驚くことはしばしばであった。

さて教えていただいたゲエズ語を使って卒業論文を書くことになるのだが、当初取り組もうと考えていたアクスム王国に関するゲエズ語史料は少なく、早々と断念した。そしてゲエズ語史料が比較的豊富にあり、また研究が手薄であったソロモン朝期のエチオピア北部史を専攻することにした。ソロモン朝とは1270年にエチオピア北部に成立した王朝で、その「諸王の王」、すなわち皇帝たちがソロモンと「南の女王」の間に生まれた子の後裔と称したために、このような名称で呼ばれている。

私にとって幸運だったのは、国内で史料をかなり揃えることが出来たことであった。エチオピア北部史の主要な史料は19世紀後半から20世紀にヨーロッパで翻刻され、各国アカデミーの紀要等において刊行されたが、東京大学の総合図書館にはこの種の学術雑誌が揃っていた。また関東大震災の後に英国政府から寄贈された夥しい書籍の中には多数エチオピア関係の貴重書が含まれていた。そして金沢大学教授の柘植洋一先生の御自宅にうかがい、蔵書の大半をお借りすることができたことも幸いであった。先生にはさぞかしご迷惑をおかけしたと反省しているが、この時に複写をさせていただいた研究書が後々大いに役に立つことになった。もちろん国内には所蔵されていない史料も多く、オクスフォード大学ボドレイアン図書館などヨーロッパの研究機関が所蔵するゲエズ語写本の複写を取り寄せることもした。

イエズス会史料

卒業論文を何とか書き上げた後に、菟先生の御指導の下にその一部を改訂して『史学雑誌』に掲載していただくことになった。しかし伝存する文書の大半がキリスト教関係のものであり、世俗文書に乏しいゲエズ語史料のみでは、研究の展開に限りがあることは目に見えていた。そこで私が目をつけたのがイエズス会史料であった。イエズス会士は、日本布教とほぼ同じ時期、すなわち16世紀半ばから約百年間、エチオピア北部で布教活動に従事した。16、17世紀という段階でヨーロッパ人がアフリカ大陸の内陸部に入って記録を残していることは珍しく、またイエズス会史料にはゲエズ語史料には見られない貴重な証言が多々含まれており、その史的重要性は計り知れない。

イエズス会エチオピア布教文書については、20世紀初頭にイエズス会士ベッカリがローマのイエズス会文書館などの所蔵文書を翻刻し、大部の史料集を刊行している。修士課程に入ってこの史料集を購入し、研究を始めようと思ったが、これがなかなかの難事であった。エチオピア布教を含む、アフリカ・アジアで布教活動に従事した宣教師の中にはポルトガル出身者が存外が多い。そのためエチオピア北部布教に関する報告の大半はポルトガル語によって書かれている。完璧とも見まがうゲエズ語の辞書・文法書を目にしていた私は、2億人以上の使用人口を誇るポルトガル語には、さぞかし優れた辞書や文法書があるのだろうと想像していた。しかしながら実態は私の予想とはかなり異なっており、歴史研究に耐え得る辞典や文法書を探すことから始める必要があった。また現在では状況は改善しているが、私がイエズス会史料に取り組み始めた時期には、国内でイエズス会のポルトガル語史料を用いて歴史研究を行うゼミは開かれておらず、手探りで研究を始めなければならなかった。海外に於いてもイエズス会エチオピア布教史料を用いるゼミがあるという情報はなかったため、ポルトガル語の解読と史料調査のためにポルトガルを留学先として選んだ。

しかしポルトガルでは古文書学が対象とするのは12、13世紀の文書であり、17世紀の文書は現代語の知識を基に解読する方法がとられていた。参加させていただいた大学院のゼミでも文書講読は行われておらず、自費でポルトガル語古文書の解読につきあってくれる人物を確保しなければならなかった。とはいえポルトガル語に接しているうちに徐々に解読能力も増し、何種類もの葡葡辞典と葡英辞典、方言や慣用語の辞典、神学や建築といった特殊分野の用語辞典、さらに手稿を解読する際に用いる略語辞典等々を揃え、どうやらポルトガル語文書を解読する体制を整えることが出来た。前述のベッカリがイタリアにおける調査を行っているので、留学中の文書調査は主に彼の調査対象となっていないポルトガルとスペインの

図書館・文書館に於いて実施した。特にポルトガル北部のブラガ地方文書館とマドリードのスペイン王立歴史学士院図書館では、エチオピア史研究者による研究が行われていない文書群を調査することができ、重要な成果を得ることができた。

現在の研究内容

では最後に、ゲエズ語史料と主にポルトガル語で書かれたイエズス会史料を用いて、現在進めている研究の内容について紹介したい。

卒業論文以来、私が研究対象としてきたのは、ソロモン朝後期に於けるエチオピア北部史である。エチオピア高原部のキリスト教徒王国の力が低迷するこの時期を、研究者たちは単なる「衰退期」と位置づけ、その研究を閑却してきた。しかしながらこのソロモン朝後期こそ、オロモがエチオピア高原各所に移動して現在の民族分布が形成され、またソロモン朝皇帝の支配が弱まる一方で、後のエチオピア帝国に連なるショア朝の萌芽が見られた時代なのである。

私の現在の研究目的は、ソロモン朝後期に、オロモの進出等によって惹起されたエチオピア北部農耕民社会の多岐にわたる変化を解明することにある。受賞対象となった拙稿もそうした研究の一環をなしている。具体的な検討課題は、ソロモン朝の統治機構に於ける変化の背景を探ることであった。「左のベフト・ワッド」と「右のベフト・ワッド」を中心とする統治の仕組みが16世紀後半に見られなくなり、ベフト・ワッド職の定数が1に減り、かつ「大小姓頭」を意味するタラック・ブラッテノチ・ゲタ職が政治的に重要な地位を占めるようになることは、ソロモン朝史研究者にはよく知られている。しかしながらこの変化がどのような意義を有するのかという点に関する研究は乏しかった。拙稿では、少なくともスネヨス（在位1607-1632年）の治世からヨハネス1世（在位1667-1682年）の治世において、この新たな制度がオロモの南方からの襲撃に対応するために維持されていたことを解明した。これまでソロモン朝皇帝たちはオロモの進出に対して有効な対策をとらなかったとされてきたが、オロモの攻撃に対応するため種々の改革を行ったのである。

これまでに発表した論考は、ゲエズ語年代記に基づいて、ソロモン朝の制度に関して論じたものが大半であった。しかしながらゲエズ語史料にもソロモン朝後期の社会変化に関する記述は散見する。またイエズス会史料には、アムハラやアガウといったソロモン朝領内の諸民族の生活の様子や、ゲエズ語史料からはなかなか窺い知ることの出来ない農耕をはじめとする生業の有様についての情報が溢れている。今後はこれらの史料の分析によって得られた知見も盛り込み、ソロモン朝後期に於けるエチオピア北部社会の変化について多角的に分析した研究の成果を公表していく予定である。

各分野の研究者の方々のご意見を今後伺わなければならないが、私はソロモン朝後期に於けるエチオピア北部社会の変化の解明は、エチオピア北部史の枠内にとどまるものではなく、東アフリカ内陸部の広い範囲の歴史研究に貢献する可能性があると考えている。牧畜民の農耕民居住地への進出と、それに伴う農耕民社会の変化は、東アフリカ内陸部に広範に生じたと推測される歴史的事象である。この事象の解明は、各地の国家形成、及び民族間関係について研究するうえで欠かすことが出来ないにもかかわらず、その通時的変化を伝える情報の乏しさゆえに、多くの地域では研究が難しい。その点、オロモ進出期のエチオピア北部については、ゲエズ語史料とイエズス会史料という2種類の同時代史料を用いて研究することが可能である。このような特性を活かし、今後もソロモン朝後期に於けるエチオピア北部社会を対象とする研究を進めたいと考えている。

最後に、薮勇造教授をはじめとしてこれまでにお世話になった先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。拙稿を結びたい。

(いしかわ・ひろき/日本学術振興会特別研究員PD)

審査結果報告

〈受賞論文〉

石川博樹

**On the Functions of the *Bəht wäddäd*
and the *Talallaq blattenoč gweta*
of the Solomonic Dynasty, 1607–1682**

(*Nilo-Ethiopian Studies*, Nos.8 - 9, pp.77-89, 2003)

(いしかわ・ひろき/日本学術振興会特別研究員PD)

選考結果

石川博樹氏は、ソロモン朝後期（1540-1855年）のエチオピア北部社会の変容に関し、ゲエズ語によって記された年代記と、イエズス会史料を主な史料として、実証的研究をおこなってきた。対象論文は、氏のこうした研究の最新の成果のひとつである。

対象論文は、17世紀に生じたソロモン朝の統治機構の変容を検討している。従来の研究では、この時期における「ベフト・ワッドド」および「タララク・ブラッテノチ・ゲタ」という官職の職掌の実態は解明されていなかったが、石川氏は年代記とイエズス会史料の精緻な分析を通じてこの問題を検討した。その結果、ススネヨス王治世（1607-32年）からヨハンネス1世治世（1667-82年）にかけての最高官職「ベフト・ワッドド」の主な職掌は、オロモの襲撃をしばしば受けていた南部地域の統治・防衛であり、他方で王の近くに仕える「タララク・ブラッテノチ・ゲタ」の職掌が拡大し、その政治的・軍事的重要性が増大した、という事実が明らかになった。石川氏はさらに、こうした統治機構の変容は、ソロモン朝が対オロモ戦の負担を軽減する必要上生じたものであり、結果として王は新たに王国の中心となったタナ湖周辺での支配強化に専念することができた、と論じている。ソロモン朝が、16世紀のムスリム勢力の侵入、16世紀後半に始まったオロモの拡散移動、さらに王のカトリックへの改宗を契機とする諸侯の反乱などにもかかわらず、ススネヨス、ファシラダス、ヨハンネス1世の三代にわたり、なぜ権力を増強できたのか（=いわゆる17世紀における「ソロモン朝の復活」）という問題に対し、統治機構の分析を介して、ひとつの解答を与えた論考ともなっているのである。

石川氏は1988年に発表した論文「エチオピア王国ソロモン朝の衰退と州統治者」（『史学雑誌』）において、従来エチオピア史研究の分野では注目されることがなかった、行政官の「称号」の問題に着目し、ゴンダール期（1632-1769年）の州統治者の称号の変遷の徹底的分析をおこなった。さらに2000年の「17世紀前半ソロモン朝のベフト・ワッドド」（『オリエンツ』）においては、

称号や職掌の変遷の分析を、より広い政治史的コンテクストの中に位置づける作業を試みているが、対象論文は近年の氏のこのような研究の延長線上に位置づけられるものであろう。むろん、統治機構の分析だけからソロモン朝の権力増強が説明できるのか、また、17世紀の「ソロモン朝の復活」の時代と18世紀後半の諸侯分立の時代（いわゆる「土師時代」）との関係をどう展望するのか、等、今後さらに解明されねばならない課題は多いが、石川氏は一次史料の丹念な分析に基づく実証的・科学的な研究方法により、将来、これらの問題にも解答を与えてくれるものと思われる。

エチオピア北部はサハラ以南のアフリカでは例外的に文字史料を用いた歴史研究が可能な地域であるが、現地諸語の習得、あるいはヨーロッパ諸国の文書館に散在する写本類の収集といった課題が存在するなか、現存する文字史料の調査・利用はこれまで十分になされてはこなかった。まして、エチオピア史研究の蓄積がない日本の研究者にとって、道は遠く見えた。こうしたなか、ゲエズ語の年代記を読み解き、ヨーロッパ人の残した史料を利用するためフランス語・イタリア語・ポルトガル語等も習得して、各地の文書館に散在する未公刊史料を発掘し、さらにこうした研究の成果を外国語でも発表して、エチオピアや世界各地の研究者との交流を進めている石川氏の活動は、日本のエチオピア研究者、ナイル・エチオピア地域の研究に携わる者すべてに、希望と刺激を与えてくれる。氏の研究の一層の発展を期待したい。

以上の理由から、石川博樹氏は2005年度高島賞受賞にふさわしいと判断する。

2005年4月13日

選考委員会

栗田 禎子（選考委員長）
石原美奈子
宮脇 幸生



スペイン王立歴史学士院図書館